



アロハ探歌 ALOHA TANKA

NO.4

2013年冬号

JANUARY 10 2013

VOL.2 NO.1

特集

☆ハワイ短歌史に残したい歌人たち
② 志賀野浦子

☆第7回国際交流短歌大会

☆エッセー：アイリン・ライザーと江戸さい子

於：湘南国際村センター



恩師・江戸さい子の横顔②

江戸さい子先生（一八八四—一九六二）は、私・石垣蕨紅が最初に短歌の手解きを受けた高校時代の恩師です。

この欄に先生の面影をぜひ掲載したいと願い、昨春秋、日本での第七回国際交流短歌大会出席後に石川県金沢の母校・北陸学院を訪ねました。同時に、江戸先生のお孫さん新重光氏にも「先生の顔写真」が頂けないかとお願ひしたのでした。いろいろ集めて頂いた中から私が選んだのが右の写真です。「北陸女学校五十年史」の中の当時の教職員の集合写真から取ったもので鮮度に欠けますが、私が覚えているお顔に最も近いこと、そして江戸さい子先生の斜め後ろには、実は教員に成りたての母・吉村繁子が映っているのです（個人的な動機を入れてすみません）。



歌集「にひしほ」の題字と著者近影（発刊時）

先生のご生涯で最も特筆すべきことのひとつに、歌集『にひしほ』（金沢北国毎日新聞出版部発行、昭和二四年秋）の刊行があります。それまでの小歌集の集大成のような歌集で膨大な作品集です。「新年の歌」三五首の中から二首：

山見れば初日輝き海見ればにひ潮満ちて年たちかへる
はつ春の浮れごゝろをいましめむいまだ還らぬ人もあ
る世ぞ（昭和二三年の作。当時は海外からの未帰還兵が多かった）

目次

恩師・江戸さい子の横顔②	2
巻頭作品	3
ハワイ短歌史に残したい歌人たち② 志賀野浦子	4
友情出詠作品	8
原 葉 池田美加 近藤秀子 パワーズ八重子	
小島夢子 ジョンソン恵子 古田和子	
作品 初期化	11
第七回国際交流短歌大会報告	12
入賞英語短歌	14
ハワイの短歌事情	16
ハワイ大学の日本語詩歌コンテスト	18
短歌朗読（日語朗読・英語朗読）	20
短歌練習ノート	21
エッセー：アイリン・ライザーと江戸さい子	24
詠草三首 三小牛	30
探歌往来	31
友情出詠作品募集および二人推敲	32
編集後記	32

表紙挿絵 〓 ハワイ在住の建築家で画家の本田邦夫氏よりダイヤモンド・ヘッドのスケッチを頂きました。今後、毎号の表紙を飾ります。紙上を借りて御礼を申し上げます。

アロハ探歌のモットー

アロハ (LOVE/MERCY) の心で短歌の道を探求する



第7回国際交流短歌大会
湘南大会
2012年11月29日

日本歌人クラブ
〒114-0022 東京都目黒区東山1-13-15 東山ビル402号
TEL 03-2260-2296 FAX 03-2260-2297
E-mail: kajinclub@gmail.com

第7回国際交流短歌大会
湘南大会
2012年11月29日
2012年11月29日
2012年11月29日

11-01	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-02	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-03	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-04	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-05	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-06	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-07	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-08	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-09	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-10	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-11	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-12	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-13	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-14	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-15	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-16	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-17	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-18	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-19	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-20	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-21	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-22	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-23	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-24	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-25	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-26	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-27	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-28	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一
11-29	山本 隆一	山本 隆一	山本 隆一



湘南国際村からの眺望

巻頭作品

御祖より受けし詩型を探る秋 湘南の秋はふるさとの色

ハワイにてお目にかかりし先生の生の笑顔に今日また出会う

*三枝昂之氏 二〇〇六年第五回国際交流短歌大会 於ハワイ

遠富士の懐かしきかな万葉も外国和歌もこころは一つ

晩秋の古都鎌倉に夫と娘とオバマの抹茶アイスたのしむ

*オバマ大統領が立ち寄ったというアイスクリーム屋は結構繁盛していた

はるばると来し詮ありき空青く「アロハ探歌」の幸先よろし

蔦紅



写真：受賞者グループ、出演者グループ、その他のグループ別に撮影

ハワイ短歌史に残したい歌人たち②

◆志賀野浦子（しがののりこ）

志賀野浦子の本名は相賀誠（そうがせい）。前号で紹介した相賀溪芳の二度目の夫人です。彼女の歌の一部は前号にも載せましたが、本号で改めて紹介しましょう。

その前に先ず、短歌とは直接関係はないのですが、最初の夫人について溪芳自身の記した感動的な記事が見つかったので、以下に記します。

○相賀溪芳の最初の結婚

ハワイのジャーナリスト四傑の一人と言われた相賀溪芳（本名川安太郎、一八七三—一九五七）は、自伝（五十年間のハワイ回顧）によれば、一九〇四年二月初め、日露戦争開戦の直前に、大阪の梅花女学校時代当地岸本つる子女史の教え子だった杉野抄（すぎのこずえ）との婚約が成立して、彼女を呼寄せ、志保沢廷にて、本川牧師の司式の下に結婚生活に入ります。

（溪芳三二歳）しかし当時の耕地労働者の賃金差別待遇改善の論陣を張つたため、一九〇八年から九年にかけてたびたび投獄され、妻は病気となり、遂に彼女は帰国せざるを得なくなるのです。相賀溪芳は当時のことを次のように綴っています。

・ ・ ・ 一番心を痛めたのは、当時ワイキキ公園の傍に居を構えていた病妻と二人の子どものことであつた。自分の入獄後いろいろ友人諸氏の厚意の下に療養を続けていたが、どうしても帰国さす方が得策だということに決定し、ドクトルも勧告するので、彼女はまだ幼い二児を携えて、帰国の途につくこととなつた。アッシュ典獄の好意で、

特に私に船まで見送ることが許され、それはサイベリア丸であつたが、アナホツ副典獄が随行して、出帆間際の船まで行き、上のサルーンで家族との別れを告げた。自分分は妻の病気の相当重態なることを知っていた。妻のほうも自覚していた。再び又生きて逢われぬことも覚悟していたが、後についてそれが事実となつた。

別れてはいつか相見む病む妻の上に幸あれ海三千里

歌になつているかどうかは知らないが、その時に口ずさんだ実感である・・・

一九一〇年七月四日、アメリカ独立記念日に特赦が下ります。入獄以来一〇〇日目で、他の運動家四名とともに入獄後は日本へ帰国するとの条件付きでした。彼は書いています。

・ ・ ・ 日本へ帰国した妻からは、入獄中も毎便手紙が来ていた。彼女は阪神間の住吉に母と共に閑居して、静かに療養を続けていた・・・七月四日に特赦されたという電報を、先ず初めにその日の大朝（新聞）で見た妻は、すぐに手紙を書いてまるで天にも昇るような気持ちですと云つて喜んでいたが、それから十数日後に、彼女の訃報が電報で来た・・・特赦の報に接してからすっかり容態が革まり、八月三日に永眠したとのことであつた・・・

・ ・ ・ 当地では、本川源之助牧師や熊田儀助夫妻その他の友人が発起され、生前妻の属していたリバー街日本人美以教会で、立派な追悼会を開催され、多数の方々の参集されたことは感激に堪えなかつた・・・

・彼女の短かった生涯も、この罷工のために払われた多くの犠牲の一つであったと思えば、聊か又慰むるに足るものがある。

○相賀溪芳の帰国と再婚

また彼は、次のようにも記しています。

・特赦されてから二ヶ月近くは夢のように過ぎて、一九一〇年八月二三日ホノルル発の天用丸で、十五年ぶりの初めて故国の旅に上った。・横浜に着いたのが九月二日・本船まで小蒸汽で友人諸氏が迎えに来て下さった、その中に大阪より亡妻の母が重雄を伴ってきた。子どもは目敏とく自分を認め、パパ万歳と嬉しそうに大呼した。・

・一九一〇年暮れに住吉の仮寓に帰っていた自分は、もう帰布の期も近くなっていたので、年末から母や子供を伴って伊勢参宮をしたり、奈良へ遊んだりしていたが、帰朝後間もなく台頭していた再婚問題が急に纏まり、大津の老政客であり、露国皇太子事件の時、津田三蔵の弁護士だった谷沢龍蔵の長女誠(せい)との縁が結ばれた。・明けて翌一九一一年一月九日大阪で挙式(溪芳三八歳、誠二九歳)、直ぐ東京に立ち十一日横浜出帆の日本丸で、単身先ずホノルルへ向けて出帆した。・日本に残った妻は、それから半歳を経て、六月に長男同伴で来布、それから自分一家には又、ハワイでの新しい生活が始まった。・

○相賀誠(志賀野浦子)の略歴

彼女の紹介に入りましょう。相賀誠(志賀野浦子)は一八八二(明治十五)年九月三十日、谷沢龍蔵(元代議士)の長女として滋賀県大津市に生まれ、大津高女を卒業しています。

そして一九七〇(昭和四五)年八月八日午後一時五〇分、ホノルルのハレナニ病院にて逝去。享年八七歳でした。



娘時代の彼女の経歴については記録がありませんが、一九一一年一月、三八歳の溪芳と結婚して彼の長男を引き取ったとき、彼女は二九歳でした。当時としては相當な晩婚です。結婚式二日後に夫は先に帰布してしまい、彼女は半年後に長男をつれてハワイに到着します。生涯実子には恵まれませんでしたが、

当時の日本語新聞「布哇タイムス」には、彼女は社交的で多趣味だったと記述されています。来布後、ホノルル日系婦人会を初め多くの公共団体、趣味の会に属し、広く社会事業に貢献したので一九六八年六月十四日：即ち移民百年祭に賢き



あたりから勲六等瑞宝章を送られた。「布哇でその生前、夫婦揃って叙勲の光栄に浴したのは、恐らく相賀安太郎氏夫妻だけにはあるまいか」と当時の布哇タイムスは報じています。

彼女の活動は、大別すると次の通りです。

△ ホノルル日本婦人会の創立当時から、引き続き終戦後も同会の役員又は顧問として奉仕

△ パン・パシフィック婦人大会にも参加、日米親善事業に協力

△ 第一次世界大戦当時から第二次大戦(夫・相賀氏は抑留されたが)、にかけて赤十字社の奉仕隊に参加(右の写真)、永年の功績で表彰されている

△ ハワイ癌協会日本人部のため募金、映画、その他に尽す

△ YWCA 国際部・日本人部の社会事業にも尽粋した

△ 趣味の方では、謡の実生会、短歌の潮音詩社、囲碁の風鈴会のメンバーとして華やかな存在であった

△ 文筆家としては、布哇タイムスの前身・日布時事社発行

の『布哇家庭雑誌』一九一六年四月号には、相賀溪芳が

「今回の帰朝と正直なる告白」を書き、相賀夫人（志賀野浦子）が「美しい日本の思ひ出」を書いている

年譜によると、誠（志賀野浦子）が手塩に掛けて育てた長男・重雄は、父・溪芳が一九五七年没後、日布時事（のちの布哇タイムス）の社長として父の跡を継ぎます。前号「アロハ探歌」21ページに相賀溪芳夫妻（安太郎・誠）の墓の写真を載せましたが、隣接して息子・重雄の墓には、一九〇五年九月三〇日—一九六九年一〇月一六日と刻まれていました。育ての母・志賀野浦子（相賀誠）の没日は一九七〇年八月八日で、重雄は母・志賀野浦子より一年早く身罷っているのです。実子のなかった志賀野浦子の晩年は、異郷の地にあつてどんなにか寂しいものであつたか想像すると涙を禁じえませんが、彼女の告別式案内に載る遺族名は、相賀美也（重雄夫人）、愛孫・ウオルター一郎、ロイ和男、佐藤ヘレン、加藤ジーン、曾孫二人と記されています。

なお、相賀の自伝（前出）には、一九〇九年に帰国させた前妻・抄（こずえ）と共に二人の子供も同行させたと記されていますが、長男が重雄であることは間違いないが、もう一人の子供の記録は、私の知る限り発見出来ません。

○志賀野浦子の短歌作品

彼女の短歌作品は、合同歌集「ラウハラ」（一九五〇）、溪芳歌集（一九五七）、合同歌集「レイラニ」（一九六三）にみることが出来ます。

捕らはれてゆく夫門に見送れば青燈の車やみに
消えゆく
（合同歌集「ラウハラ」）

つわものの血しほに染むる包帯と思ひて巻けば
心いたまし
（同）

恋もせず過ぎにしあとをふりかへりなごりおし
くも思ふ我かな
（同）

一首目：真珠湾開戦当日の緊張が伝わってきます。二首目：戦時中の赤十字奉仕の歌。三首目：素直な心の表現。

以下は、夫の逝去後の作品です。

とこしへに帰らぬ夫と知りながら足音すると耳
すますなり
（「溪芳歌集」の巻末「ついおく」）

愛されし半世紀をばかへり見てわがままなりし
事のくやまる
（同）

一言のごとも言はずこの年月わがままゆるし
し夫ぞ恋しも
（同）

日にまして淋しさのみがつのりゆく主なき室に
一人坐りて
（同）

在りし日に夫が用ひし拡大鏡ふと目にあてて新
聞を見ぬ
（合同歌集「レイラニ」）

いつかまた帰り来つらむ心地して常着の服にプ
ラシかけをり
（同）

ふたりして何時も出かけし集まりに一人淋しく
この頃ゆくも
（同）

おたがひに我がままのみを言ひ張りし思出のみの
残るこの頃
（同）

○コメント(考察)

自国を離れて移民した人々には夫々のドラマがある。相賀溪芳自身も移民当初は肉体労働にも携わったようだが、のち新聞人して日本人移民たちの労働争議をリードして、百十日も投獄の憂目に遇った。この間の彼を精神的に支えたのが最初の妻・抄(こずえ)で、溪芳の最初の歌「別れては・」の発生に繋がっている。このとき溪芳はもっと数多くの歌を詠んだのではなからうかと想像するのだが、記録は残っていない。

最初の妻は、当時移民の間で流行った呼寄せ婚であるが、彼女の出身校・梅花女学校はミッショナルスクールで、英語教育とともに和歌を含む国語教育も盛んだったことを考えると、抄も歌を詠んだのでないかと考えられるが記録はない。

二度目も見合い結婚である。妻・志賀野浦子は相賀溪芳の鉄柵生活、すなわち第二次世界大戦中の日系人収容所生活を精神的に支え、自らも赤十字に奉仕して健気に留守を守った。

勲五等瑞宝章授与(一九五六年)という相賀溪芳の輝かしい一生を支えたのは、二人の妻であった。そしてハワイ短歌史の礎を築いたのも相賀溪芳で、それを陰で支えたのが二人の妻だったと言っても過言ではない。

ハワイ短歌史に於ける溪芳夫妻の意義の考察を進めたところ、戦前の彼らのハイライトの一つに、一九三四年(昭和九年)九月より半年間の日本滞在がある。溪芳にとっては四度目、志賀野浦子にとっては三度目の訪日で、前とは十年目であった。この時、二人は多くのハワイ関係者との会合(写真)



一九三四年(昭和九年)九月、東京で集合したハワイ関係者前列中央が相賀溪芳夫妻



集合写真などを見ると、これらの人々の中に文筆家や詩人・歌人はいなかったのか。釈空との関係者はいなかったのか、との疑問が湧く。

この年の二人の半年間の日本滞りは忙しいものであったが、溪芳は十月十六日より十一月二日まで、単身、満州視察にかけ、妻は大阪の実家に滞在する。溪芳はハワイ帰来後「日満を覗く」と題した手記(この本は当時の日本軍部で問題になったことを出版するが、同書には彼が大陸で詠んだ短歌がかなり載っている。妻も当然それを知っていて(これは筆者の推測だが)もつと自分も作歌に精進したいと願ったに違いない。何事にも積極的な彼女のことだ。大阪の実家に単身で暮らした間に、更なる短歌の道を模索して行動したとは考えられないだろうか。釈空の出身地・大阪と大津とは距離的にも近いし、既に彼の歌集「海やまのあひだ」も刊行されていた。志賀野浦子が遙空と出逢うチャンスはなかったのだろうか。

皇室関係、新聞関係、政治経済関係、国際関係、文化人関係などのリーダーたちとの積極的な交流を行い、多くの著名人たちと面会している。溪芳は自著の中で一応の名前を記録してはいるが、全部ではないと思う。

日本の秋を詠う

原 葉

肌さむき明治神宮参道を吾子と歩きて清し秋味わう

燃える赤琉球グラスで飲む君はもみじさながらゆらめ
きており

ふきあげる平和公園噴水よ輝くほどに水は悲しも

長崎の被爆に消えし七万余平和の像にただ手を合わす

草千里月日の彼方にわれの居て撮影ロケのカメラ反射
す遠き日のみどりつらなる草千里若き女優の影うかび来
ぬ

道の駅朱色の柿にみせられて秋を買い来し阿蘇駅近く

夜を徹し聞こゆる川音心地よし紅葉まじか鬼怒川のほ
とり

松島の震災跡は見えずとも一茶資料館閉鎖のままに

一年に一度相見る友夫婦日本と米国三十余年たちて

理由なき怒声で駄々をこねる男哀しからずや老夫病み
ており今日もまた怒声浴びせる老病夫 愛しく受けて仏子お
ろがむ老夫病む哀しからずや今日もまた慈母の気持ちで彼を
看取らむ我に日々六字の名号なかりせば此の世は地獄生きる甲
斐なし

み仏に生かされている私ですみ法の道を一筋歩く

足るを知る心があれば不足なし一にも感謝二つにも感
謝お金とは食うだけあれば良しとする一にも健康二つに
も健康母の日に感謝我もまた母なり先祖（仏恩）に感謝南無
阿弥陀仏

大輪の菊花豪華に盛り活けて感謝祭祝う食卓の七面鳥

初春や今ここにいろお陰様法乳飲んで生命輝く

わが師

近藤秀子

「昆虫記」「ローソクの科学」勧めくれし高校恩師事故
で逝きしと

入院中の我にたびたび本持ちて見舞い給いし師のあり
がたき

井伏鱒二・太宰・かの子・勘助*など読みたる本を今に
忘れず

*中勘助＝小説家 夏目漱石に師事

池田先生愛称「池チヨコ」チヨコチヨコと素早き御姿
眼裏にあり

結婚式に空席ひとつ残りたり師の身罷りしを知るよし
もなく

師の墓を探しさがして泥の道 日向の墓地も日陰の墓
地も

墓標ついに見つけ得ずして帰郷せり黄昏の墓地ただ寒
かりき

奥つ城は国分尼寺か国分寺いかに変りしや仙台の町

幼な子をひとり残して逝き給うその子もすでに祖母た
るらんか

いつしかに師の齡越え老い初めぬ相まみえる日遠から
ずなる

○

パウーズ八重子

家々の金木犀の匂う町そぞろ歩いて秋を味わう

起き出でて雨戸開ければ裏庭の木犀の香が部屋に流れ
る

月の光庭の樹立ちに青く冴え虫のすだく音一際高し

寅さんに逢える気がして江戸川の堤を歩き船の乗場へ

関西弁長野弁と話しつつのどかに行くは矢切りの渡し

剣道の道場に見るわが甥は凜々しく爽やかな完璧な武
士

瀬戸内の島々眺め和む海赤穂岬に秋の潮風

内蔵之助おりくの別れし船着き場史実は悲し海は美し
く

見渡せば九十九里浜波高し亡き友偲ぶ悲しみの宿

ハワイに老いる

小島夢子

ひまわりの黄のはげしきは我が命深く生きたる思い出
の数

濃き赤のハイビスカスが次々と咲いてゆくよな思い出
数々

若き日に思い描きし老後とは全く違う冬の明るさ

キラキラと光るマニキュアしてもらうシニアフェアの
秋の会場

この恋の終らぬうちに死ねればと思えるのもよい老い
の日々

出る杭になりて打たれむ七十年の忍びし心をはなちて
やりたし

云いたきを云わずに終るなでしこの徳を教えしふるさ
と日本

世は春でこともなしとぞ思うだに老いの色したしぐれ
雲かな

満月の光につつまれ夜が匂うハワイの夜のパイアの
花

好きな句を一首選べば 雪と寝た竹を朝日がゆり起す

君のまく水の音にて目ざむれば鳥鳴く庭にさみどりな
がれる

○

ジョンソン恵子

「六十の手習い」とひと言うわれもまた喜寿に至りて
短歌ひもとく

九月より練習重ねし聖歌隊主の生誕を祝うはうれし

内乱のニュースに想うそのむかし聖徒パウロの「ダマ

スコへの途」

(短歌はリズムが大事です。以上三首：若干手を入れさせて頂きました)

○

古田和子

怠けたい右脳を補い活発な左脳には古い記憶が一杯

カリフォルニア州歴百六十二年なり排日移民の哀史も
過去に

「これをしよう」思った時からするまでの時の長さで加齢を測る

夜の散歩怖くて出来ない街に住む今年も殺人百人の上
灰色の霧の空にも何処からか光りただよい木の葉に映
える

西に向き飛ぶ鳥追いてもう一羽冬枯れ始めし梢の空を
東向き銀色に飛ぶ飛行機の爆音もない窓にいる朝

めえめえと運動場でなきながら山羊お産せり早雲山麓

入選作品（朝日歌壇2011年1月 選者：馬場あき子）

霧晴れてゆく気配あり自動車の影が地面に薄く現る

入選作品（朝日歌壇2012年11月 選者：永田和宏）

古シャツを繕うて欲しと言う夫とぼつぼつ老いるこの
アメリカで

入選作品（第5回海外文藝祭2009年）

のちの世はアメリカ脱出したいのに今と同じがよいと
夫言う

入選作品（第6回海外文藝祭2010年）

もうそこに戦前昭和の東京も家族も向田邦子も居ない

入選作品（第8回海外文藝祭2011年）

作品 初期化

石垣萬紅

深呼吸アアありがたき今朝の空あの白い雲この深い青
ハワイの空この大空に自在なるものを観よとぞ どこ
までも青

孫娘フェイスブックに近況を絵文字まじえて載せてる
「いいね！」

今更にインターネットの奥深さ身に沁みており星かけ
遙か

出来得ればあの星訪いて初期化したい初期化されたい
心身すべて

ネット犯罪ニュース賑わす世となりぬ今宵は雨かライ
トが潤む

知らぬ間に犯行メールの発信者とさるる時代になりし
かこの世

ネットとは無縁に生きる古い夫の朝の新聞インクが匂
う

（一部を世界樹第二五号にも投

第七回国際交流短歌大会報告

二〇一二年一月二八日―二九日、神奈川県湘南国際村センターで日本歌人クラブ主催、第七回国際交流短歌大会が開催され、ハワイから四名が参加しました。



日本歌人クラブ会長・

秋葉四郎氏を囲む

←
ハワイからの四人

ギルバート ペリー

石垣篤紅

秋葉四郎会長

近藤秀子

筒井みさ子

短歌大会出席者は全体で
一三〇名程度でした

◎
近藤秀子

初めて参加された近藤さんと筒井さんが感想を寄せて下さいました。

開催の朝、国際村センターから富士山がすばらしく大きく見えた。前日着いた時には全然見えなかったのに、幸先良し、の感じ。

国際交流短歌大会にハワイからとして石垣先生、筒井さんと共に参加させて頂いた。三年毎に開催され、前回の会場はホノルルだったという。午前はワークショップと基調講演、詩人のアーサー・ピナード氏による講演は分かりやすく熱のこもったものであった。

午後はパネルディスカッションに続いて、入選歌の表彰式、英語部と日本語部。休憩の後に「ハワイの短歌事情」と題して石垣先生のスピーチ、「ハワイ大学日本語学科における詩歌コンテキスト」で筒井さんのスピーチがあり、最後に多言語、日英語の短歌朗読があった。

初めての参加であり、短歌を作り始めて日の浅い私には、日本語の短歌だけで戸惑いが多いのに、他言語の作歌や翻訳の難しさを知り驚くことの多い大会であった。沢山のすてきな方にお逢いできて嬉しかった。

◎

筒井みさ子

日本歌人クラブ主催の国際交流短歌会については以前から石垣先生に伺っていましたが、参加したのは今年が初めてです。今年は、開催日の前後に日本に行く予定があったこともあり、参加を決めました。

大会の当日は、湘南の会場から、富士山の美しい姿を見ることができました。一二〇名ほどの参加者の中には着物姿の女性もちらほら見え、三年に一度の国際交流短歌会ならではの雰囲気でした。

大会では、今年の入賞者の表彰の他「災害を読む」という題で東日本大震災に関する日英両語の短歌朗読もあり、感銘を受けました。その他、キーノートスピーカーのアーサー

ビナードさんを始め、パネリストの皆さんの短歌を翻訳する上での心構え、こつ、苦労している事、などについて活気のある意見交換や発表が行われました。ハワイで生活している私自身も、いろいろな短歌を英語で家族や友人に伝えたいと思うのですが、難しく挫折することも多いので、非常に参考になることが多かったです。

また、タンカ・ジャーナル編集長の結城文氏のお取り計らいで、今年で十五年目になるハワイ大学の詩歌コンテストについて、日本語詩歌委員会を代表して短いスピーチを行う機会が与えられ、コンテストを紹介できたのは幸運でした。今回の国際大会では、短歌の国際化に真摯に取り組んでおられる方達がたくさんいらっしゃることがわかり、大変刺激をうけ、励まされたことでした。

以上

◆このページ下段に大会風景写真の一部を載せました。

◆アーサー・ビナード氏の基調講演は巧みな日本語で、聴衆を飽きさせない魅力がありました。ただ質疑応答の時間が充分でなかったのは残念でした。私(石垣)個人も多くの示唆を得ましたが、一例をあげると柳原白蓮の次の歌：
英霊の生きて帰るがあると聞く子の骨壺を振れば音する
のビナード氏の英訳、こんな訳し方もあったのかと衝撃を受けました。(意訳ですが白蓮の心が切実に表現されています)

Mistaken Identity happens... some War Dead

return alive ... I shake my son's urn. It rattles.

◆今回は世界各地から五八九首もの他言語短歌の応募があったとのことで、大きな驚きと喜びを覚えました。

次ページに入賞した十三首を順に横書きに掲載します。



右：基調講演アーサー・ビナード氏
題=三十一文字の為替レートは？
～短歌の国際化について



上：パネルディスカッション

右からアーサー・ビナード氏、秋山佐和子氏、中川佐和子氏、三枝昂之氏(氏は2006年のハワイ国際短歌大会で基調講演された)



左：総司会の結城文氏(タンカ・ジャーナル編集長)

◆日本語短歌も多くの応募があったようですがハワイからは、老いたればお手々つないで一二三やわらかきハワイの陽射したのしむ

という石垣蕙紅の歌が「秀歌賞」を受賞しました。

The 7th International Tanka Festival Competition, 2012
By The Japan Tanka Poets' Society

There were 589 entries from all over the world for the above mentioned Tanka Competition. The judges are Jane Reichhold (U.S.A.), Beverley George (Australia), Yasuhiro Kawamura (Japan), and Aya Yuhki (Japan).

The results are as follows:

Certificate of Merit by The Japan Tanka Poets' Society

who knew that
an envelope of poems
could hold so much? —
little boats, little hopes
sent out into the world

by Joyce Wong (Canada)

Certificate of Merit by The Japan Times, Ltd.

often I've heard
wise old men declare
a gladness
to depart this life—
can it be they lie?

by Michael McClintock (U.S.A.)

Certificate of Merit by The 7th International Tanka Festival Committee

the news
when it came
shattered my day
a thousand scrambled pixels
to replace your missing face

by Margaret L. Grace (Australia)

Certificate of Merit by The Tankakenkyusha Ltd.

part of me
knew they'd come
high clouds
darkening summer sunlight
and your chest x-ray

by Michele L. Harvey (U.S.A.)

Certificate of Merit by Kadokawa Gakugei Shuppan Publishing Co. Ltd.

Just a shooting star
disappears into nowhere
at our old window—
alone in this night in which
we could have talked about light

by Eduard Tara (Romania)

Certificate of Merit by The Honamishoten Corp.

astride
a fault line in the bay
a sea star
one small splice
in this fractured world

by Lesley Anne Swanson (U.S.A.)

Certificate of Merit by The Gendaitanka Corp.

nine autumns past
first trip to my homeland...
now in Taipei
drinking alone in moonlight
I still long for Taipei

by Chen-ou Liu (Canada)

Certificate of Merit by Jane Reichhold

this trailer park,
with its throng of misfitting wrecks,
my mind—
will it lilac-free itself
will it daisy-poeticize

by Spiros Zafiris (Canada)

Certificate of Merit by Yasuhiro Kawamura

Seasons are out of order—
cherry and plum flowers
blossom side by side
behind the bright colors
hides a piece of loneliness

by Chiau-Shin NGO 吳昭新 (Taiwan)

Certificate of Merit by The Nagaramishobo Corp.

aged laughter
from three stooped women
fills the cloisters
in the Hospice garden
trees bow down with ripened fruit

by Anne Benjamin (Australia)

Certificate of Merit by The Irinosya Corp.

eight chicks
of Nipponia Nippon
hatch in the wild
—resilience—
so in Fukushima

by Fusako Kitamura (Japan)

Certificate of Merit by Beverley George

I climb through
sunlight and alder woods
to find him
sleeping among blueberries
a dragon built of stones

by Kirsty Karkow (U.S.A.)

Certificate of Merit by Aya Yuhki

sudden crack
as a bunya pine cone
splits open—
no way to prepare
for that kind of news

by David Terelinck (Australia)

1) ハワイへの日系移民と人口動態

ハワイへの最初の日系移民は1868(明治元)年、約150人。元年者とよばれた。以後1885(明治18)年、日本ハワイ両政府間の契約で官約移民とよばれる本格的な移民が始まり、1893(明治26)年の終了まで約3万人がハワイへ渡った。以後は私約移民、自由移民として渡航者が増え、1896(明治29)年の統計では、ハワイ全人口が各国人合せて総計10万9020人、うち日本人は全島合せて2万4407人。その後1901—1908(明治34—41)年の間に約7万5千人が移民(呼寄せ移民、写真花嫁など)として来布。

1920(大正9)年の調査によればハワイ生まれの二世が4万9016人、1933年(昭和8)には10万8355人、1940(昭和15)年には12万2188人となり、逆に一世の数は、1920(大正9)年に6万258人、1933(昭和8)年には4万3524人、1940(昭和15)年には3万4661人と減ってゆく。1924(大正13)年の北アメリカ合衆国移民法(排日移民法)や第2次世界大戦で一時移民の数は減ったが、戦後は戦争花嫁、留学や起業など戦後移住者が増えた。21世紀に入り、2009(平成21)年のハワイ全体の人口は129万5178人、うちアジア系人口が全体の38.8%。日系人は17%に当たる22万人を維持している。因みにハワイの白人の人口は全体の24.7%。(数字:アロハ年鑑No15より)

2) 初期の短歌活動

移民の数と比例してハワイの文芸活動は盛んになる。最初の文芸誌は1909年から1910(明治10—11)年まで続いた「火星=代増田玉穂」。次が1911(明治44)年の「高潮(代浅海葦風)」。短歌活動の発祥は1913(大正2)年秋発足の「みどり社」で、その詠草が当時の日本語新聞を賑わしたといわれる。1914(大正3)年から「海角(註)文芸社」「白光」「布哇」「火の湖」「ザボテン」、1915(大正4)年に「洋島」、1917(大正6)年に「銀草詩社」「南国巡礼社」「失楽社」、1918(大正8)年に「銀星詩社」が生まれては消えた。その後を受けて1922(大正11)年に「潮音詩社」が誕生、今日まで続いている。

3) 日本語新聞と短歌

日本人は3人寄れば新聞や雑誌を発行するといわれるほど、当時の日本人は一旦移民として海外に出るや新聞を出したといわれる。新聞発行に比例して俳句や短歌の活動も活発となり、それらはまた新聞の紙面を飾った。

ハワイにおける最初の日本語新聞は、1892(明治25)年創刊の「日本週報」。日刊新聞の最初は1894(明治27)年創刊の「布哇新報」、月刊紙は1892(明治25)年創刊の「やまと」新誌で、以後、布哇朝日や布哇毎日など日本の新聞名を模したのもも出たが、主なものとして「日布時事(のち布哇タイムス)」、「ハワイ報知」などがあげられる。「ハワイ報知」は今日も日刊紙として現役。これらの新聞は挙って文芸欄を設けて俳句や短歌を掲載した。この流れは今日まで続き、現在の日本語新聞＝「ハワイ報知」「ハワイ・パシフィック・プレス」「日刊サン」の3新聞は文芸欄で月1回、歌人たちの作品を掲載している。

4) その後の短歌活動

◎1922年発足の「潮音詩社」は順調な発展を遂げ、最初は機関紙「カマニ」(第6号まで)、同人歌集「夜開花」を刊行。戦後は同人歌集「ラウハラ」(1950)刊行後、1956年頃から日本の「林間短歌会」(主宰=木村捨禄)の傘下に入って「林間ハワイ支社」となり、合同歌集「レイラニ」(1963、林間叢書59)、「レインボウ」(1972、林間叢書202)、「ベアの実」(1984、林間叢書244)、「アロハの島」(1990、林間叢書306)、「ゴールドツリー」(1995、林間叢書343)、「貿易風」(2003、林間叢書376)、そして今年「虹雨花の島」(2012、林間叢書400)を刊行。戦時中に一時衰退の時期があったが、相賀溪芳など主な潮音詩社の同人たちが収容所に於いても歌会を開いたという記録がある(ローズバーク収容所における砂丘詩社など)。

◎1956年頃、ハワイでは「をだまき短歌会(主宰=中河幹子)ハワイ支部」が発足、1985年には支部発足30年記念合同歌集「繖形花」を刊行している。この流れは中河幹子の没後、東京の「をだまき短歌会」が終息したのちも、ハワイでは「風紋短歌会」として独自の短歌活動を続けている。

◎「をだまき」に遅れること2年、1958年、「山峡(やまかひ)短歌会」が発足。歌集「やまかひ」第1号、および第2号が発行されている。

◎この間に、多くの個人歌集も刊行されている。(拙著：「ハワイ短歌 98 年のあゆみ」参照)。

5) 現在のハワイにおける短歌結社・歌誌その他の活動

潮音詩社短歌会 前述のごとく 1922 (大正 11) 年に発足した同社は今年 (2012) 10 月 21 日、創立 90 周年記念会を開催。合同歌集「虹雨花の島」を刊行。変形 A5 版。全 160 ページ。林間短歌会主宰・香取俊作氏の序文および 14 首に続き 12 人の作品 (各人 50 首) を掲載。

同会は定期的に毎月第 2 日曜日に歌会を開催。同人の作品は日本の月刊歌誌「林間」に掲載。各人の 1 首が毎月 3 つの日本語新聞に載る。新聞に作品を寄せるメンバーは 9 人程度。

風紋短歌会 前述のごとく「をだまき短歌会ハワイ支部」終息後、独自の活動を進めている。定期的に毎月第 2 土曜日に歌会。各人の 1 首が毎月 3 つの日本語新聞に載る。新聞に作品を寄せるメンバーは 10 人程度。

ハワイ短歌会 昨年 (2011) 10 月 2 日、発会式が行なわれ華々しいスタートを切った。最初は 50 人近いメンバー。毎月第 4 日曜日に歌会。ほかに講演会、新年宴会、百人一首カルタ大会、お寿司を食べる会、七夕、観月会、創立 1 周年祝賀会など活発な行事や機関紙発行など目覚ましい活動がなされ、1 周年記念には「ふゆみどり」と題した合同歌集を刊行。A5 版、全 65 ページ。40 人が各 3 首づつ作品を寄せている。新聞への作品掲載は毎回 10 首程度。

受賞など 2012 年度はハワイから、海外日系人文芸祭および明治神宮秋の大祭献詠歌に多数が応募。その中から潮音詩社 1 名、ハワイ短歌会 4 名、風紋 1 名が文芸祭に入賞・入選。ハワイ短歌会 2 名が明治神宮秋献詠歌に入選。

ハワイ大学詩歌コンテスト ハワイ大学マノア校東アジア言語文学学科では、グラディス中原博士、楽満真美先生、スティーバソン筒井みさ子先生を中心に、1999 年より今日まで毎年、日本語を外国語として学ぶ学生を対象に短歌を含む詩歌コンテストを行っている。see→"From Kokoro to Kotoba" (詳細は当日発表=筒井みさ子)

新聞連載 日本語新聞パシフィックプレスに毎月 1 回「エンジョイ短歌」(執筆=石垣蕙紅) を連載。2012 年 12 月号で通算 48 回目を数える。(当日会場にてコピーを回覧)

English Tanka 2010 年 6 月より 2011 年 10 月まで、25 回に亘ってパシフィックプレス紙に掲載。22 人の作品が寄せられた。(当日会場にてコピーを回覧)

木曜午餐会スピーチ 毎週木曜日にヌアヌ YMCA で開かれる木曜午餐会は 90 年の歴史がある日系人の勉強会である。さまざまなテーマで講演などが行われるが、短歌に関連して、

- ・覗いてみよう現代短歌：塚本邦夫／寺山修司の軌跡から (2010 年 4 月 29 日)
- ・阿波丸で散った浅海青波のエピソード (2011 年 4 月 21 日)
- ・妻たちの愛の歌：2 組の夫婦歌人=志賀野浦子と河野裕子 (2011 年 12 月 1 日)
- ・金環日蝕：写真と短歌のコラボレーション《引用短歌：秋葉四郎作品と万葉集》 (2012 年 9 月 20 日)

4 発表いづれもパワーポイントを用いて石垣蕙紅により行なわれた。

6) 歌誌：「アロハ探歌」の発行

今年 4 月より、石垣蕙紅個人誌として「アロハ探歌」という小さい冊子を季刊で年 4 回発行している。モットーはアロハ (LOVE, MERCY) の心で短歌の道を探求することで、短歌のタンを「探」という字にした。現在第 3 号まで発行済み。できるだけハワイらしい特色を出したいと願い、特集「ハワイ短歌史に残したい歌人たち」(第 1 回は相賀溪券) 欄を設けて、過去にハワイで活躍した歌人たちの紹介に力を入れてゆく予定。更に来年からは出来れば英語短歌も取り入れたいと考えている。どうぞご支援ください。

お願い

「アロハ探歌 NO3」12-13p のコラム「釈迦空とハワイ」にも書いていますが、戦後、ハワイの歌人たちが釈迦空 (折口信夫) から教を受けたという記事が、少なくともハワイの 3 つの文献に載っています。しかし具体的な事実は全く不明です。戦前に堀口大学がハワイを訪問・逗留したこと、ハワイから数人が柳原白蓮を訪ねたことはあります。しかし、戦後になって釈迦空から教を受けることが果たして可能だったのか。あるいは、当時のハワイの歌人たちの単なる「願い」だったのか、それとも、誰かハワイに関係ある人物が釈迦空を訪問したり文通したりしたのか、小さな情報でもお知らせいただければ大変ありがたいです。どうぞお願い致します。

ハワイ大学の日本語詩歌コンテスト

ハワイ大学東アジア語学文学部 日本語科講師

2012年11月28日

筒井みさ子

msteverso@hotmail.com

(808) 956-2546

日本語関係の受講者：

ハワイ大学の日本語専攻の学生は217人（今学期）。

ハワイ大学で日本語関係の授業を取っている学生は（学部、大学院）延べ1300人。

日本語詩歌コンテスト

概略：1999年に開始。対象は日本語を母語としない学生。日本語関係の授業を取っている学生。参加は自由。参加者は1年目に54人、12年度は209人（282作品）に成長。

目的：学生の創造性を刺激する。授業で習ってきた表現や文法などを総合的に使い、それを発表する場を与える。

創作活動：クラスで詩、短歌、俳句などを紹介する。

ウェブサイトでも過去の入賞作品を読む。詩歌に関する講義も行われる。

<http://hawaii.edu/eall/japanese/eventsorg/>

賞：レベルごとの賞のほか、千宗室賞、石垣先生のご好意により設けられた石垣短歌賞などがある。

詩歌コンテストと地域の関わり：ホノルルの企業、団体などからの寄付で運営。ホノルルの日本語新聞への掲載と、ホノルルの日本語放送局での放送。

作品の内容：自然を題材にした詩歌、青春の悩み、喜び、悲しみ、家族、学生生活など。

学生の詩歌の例

From "Kokoro to Kotoba: University of Hawai'i Japanese Poetry Contests 1999~2008"

Translated by Gladys Nakahara

Vanessa Napoleon (Jpn. 202 1999)

「七月の冬」

きのう公園へ行った
あるきながら楽しいうたをうたった
木の下のみどりのベンチにすわった
待った...そして待った...そして待った
でも、かれは来ませんでした

今、ベンチは古くて茶色です
うたうたは楽しくありません
七月に冬があります

"Winter in July"

I went to the park yesterday
While walking, I sang a happy song
I sat on a green bench under the trees
I waited...and waited..and waited
But he didn't come

Now, the bench is old and brown
The song I sing is not happy
It is winter in July

<p>Mark Panek (Jpn. 202 2001)</p> <p>「ウクレレ」 やわらかい ウクレレの音 夏の歌</p>	<p>"Ukurere" Soft is The sound of the ukulele The song of summer</p>
<p>Blane Ogawa (Jpn. 102 2001)</p> <p>「おとうと」 おとうとと さむい夜は ココア飲む</p>	<p>"MY Little Brother" With my little brother On a cold night I drink cocoa</p>
<p>Sherry Tanaka (Jpn. 202 2004)</p> <p>「ハワイが一番」 きれいな夏 きれいな冬 一年中やさしい風がふく やっぱり一番 ハワイが一番</p>	<p>"Hawaii is the Best" Beautiful summer Beautiful winter All year long Gentle breeze blows It's the best after all, Hawaii is the best</p>
<p>Weng Seong Siu (Jpn.401 2006)</p> <p>不器用で 彷徨う僕は 怖くても 夢に向かって 飛び立つきつと</p>	<p>Being bumbling And unsteady I'm afraid, But I'll fly toward my dream For sure</p>
<p>George Kidera (Jpn. 431 2006)</p> <p>こうしても ああしていても 悩みあり すつと消えたら 楽なのになあ～</p>	<p>Whether I do this Or do that The worries remain How easy it would be If they'd just quietly disappear</p>
<p>Takashi Miura (Jpn. 431 2007)</p> <p>雲が行く マノアの山の 頂に たなびき消える 霞残して</p>	<p>The clouds pass over The peaks of the Mountains in Manoa Leaving in its wake A disappearing trail of mist</p>

<第7回国際交流短歌大会 短歌朗読>

日語朗読：石垣蕙紅

英語朗読：Gilbert J. Perry

青き地平線
The Blue Horizon

このままに青き地平線に溶け込みて
ゆきたし機窓に額を寄せつつ
oh, how I wish
I could melt
into the blue horizon,
drawing up my forehead
to the airplane window

わが消えし次の世もまた星たちは
天を飛ぶのか何億光年
after I am gone,
will the stars in the next generation
still be shining
in the sky over billions
of brighten years?

人生は溜息のごと短かけれ
束の間の生を直に生かます
so short lived
our life just like a sigh
so this brief moment
of time allowed us
we wish to spend it gracefully



熱くもあり冷たくもありし歳月か
越えて迎うる復活のミサ
years and months
from time to time bringing
warm and cold days
now over, greeting
the mass of Resurrection

今日生えて明日は炉に焼く野の花も
主は装うと読めば安けし
how peaceful I feel
reading the Lord
clothes the wild flowers today
and gone tomorrow,
burned up in the oven

(THE TANKA JOURNAL 2012 NO.41, composed by Choko Ishigaki)

高野公彦「短歌練習帳」をテキストに有志が集まり、月一回、勉強会を開いています。本欄ではそのあらましを抜粋・連載します。

短歌練習ノート 第4回

前回の復習：V歌の表記法のこと

歌Ⅱ坂井修一（かりん）、穂村弘（かばん）

悪い例（細字）↓訂正（太字）

⑤夢のなか亡き人だれも現れずだ折り折りに見る亡母の夢↓夢のなか亡き人ほかに現れず折り折りに見る亡き母の夢

⑦撫子は淡紅のいろ月の夜を揺れぬしならむ朝霧に抱かるる↓撫子は淡紅のいろ月の夜を揺れぬしならむ明けて霧の中

前回の復習：VI景と情の組み合わせ

歌Ⅱ尾崎左永子（星座）、佐々木幸綱（心の花）

道浦母都子（未来）、時田則雄（辛夷）

木畑紀子（コスモス）、内藤弘（音）

◎あったことなかったやうでなかったことあったやうなり白萩が散る

作者Ⅱ木畑紀子「歌明かり」

木畑紀子プロフィール

昭和三年八月一六日和歌山生。短歌結社（コスモス）所属。「歌あかり」「曙光の歌びと」（短歌年鑑平成二四年版）

現代歌人協会会員。『コスモス』選者。朝日カルチャーセンター梅田教室講師。

◎父であることなきままに過ぎし日々雪に埋もれし自転車がある

作者Ⅱ田中濯「地球光」

田中濯プロフィールⅡ（短歌年鑑記載なし）

ブログから：歌人としての筆名は田中濯です。

短歌結社誌『塔』所属。第一歌集『地球光』（青磁社 2000）。第十八回歌壇賞次席、第十七回日本歌人クラブ新人賞など。たまに歌集をいたたくものの、忙しさにかまけて何もしておりません。詩客に短歌時評を書きました。必要なので角川短歌の企画を褒めていますが、じつはよりは、それをやっている人々の研究なのでは？

内藤明プロフィールⅡ昭和八年東京生。「音」所属。「壺中の空」「夾竹桃と葱坊主」「斧と勾玉」

時田則雄プロフィールⅡ昭和二年北海道生。「辛夷」主宰。「北方論」「十勝劇場」「ポロシリ」（いずれも短歌年鑑平成二四年版）

今回の練習：VII文語と口語

（いずれも短歌年鑑平成二四年版）

◎鏡なす「みなかみさん」が真麻蔭の「フツキー」となるこいつ酔ってる

「口語を生かした秀歌」より

俵万智（心の花）、川野里子（かりん）

◎この人の中に居たのか 縞馬のしま溶けるように昼寝する母

駒田晶子プロフィールⅡ昭和四九年福島生。

「心の花」所属。「銀河の水」

◎鏡なす「みなかみさん」が真麻蔭の「フツキー」となるこいつ酔ってる

水上英季プロフィールⅡ昭和五五年東京生

『コスモス』所属。「静かの海」

◎鈴に似るーと云つてもいまだ当らないこの少女らの笑ひあふこゑ

西村陽吉プロフィールⅡ一八九二—一九五九年

北海道生。東雲堂主・西村寅次郎の養子に迎えられる。書店の経営に参加して、明治末期から大正期にかけての代表的な優れた詩・歌集を出版した。

石川啄木歌集「一握の砂」「悲しき玩具」、北原白秋歌集「桐の花」、若山牧水歌集「別離」、斎藤茂吉歌集「赤光」、与謝野晶子歌集「さくら草」など。（現代短歌大事典）

◎敗戦を俺は喜ぶ／この日から／圧制の鎖が断ち切られたのだ

渡辺順三プロフィールⅡ一八九四—一九七二年富山生。一九二四年に「貧乏の歌」。二五年に西村陽吉、中林幸助らと口語短歌誌『芸術と自由』創刊。二九年にプロレタリア歌人同盟を結成。三六

年に文学評論編集者として検挙された。三九年に築地署に送られた後、東京拘留所に収容され、四三年に保釈。四六年に新日本歌人協会を結成、『人民短歌』を創刊。しかし五〇年に始まった朝鮮戦争でのレッド・パージや組合弾圧という反動期となつて、「人民短歌」は『新日本歌人』と改題された。歌集に「貧乏の歌」「新しき日」「日本の地図」など。歌集四冊。評論集は二〇冊を越える。

（現代短歌大事典）

◎するだらう ぼくをすてたるものがたり
マシユマロくちにほおぼりながら

村木道彦プロファイルⅡ昭和一七年東京生。
所属なし。「天啓」国文社歌人文庫「村木道彦歌
集」「存在の夏」。八〇年代後半のライトバースの
先駆けをなした。

(ライトバースⅡ風俗的、広告コピー的、非伝統的な
文体の作風に対しての総称。もともとは詩の予用語で、
重苦しい表現を避け、あえて軽い文体でテーマを浮き
上げらせる方法で書かれた作品のこと。)

◎男の子なるやさしさは紛れなくかしてこ
らんぼくが殺してあげる

平井弘プロファイルⅡ昭和一一年岐阜生。所
属なし。「顔をあげる」「前線」「振りまはした花
のやうに」「フィクショナルな作品世界の設定に特
徴がある。上出の歌、発表以来「男の子なるやさ
しさ」を持つ者と「ぼく」との関係をめぐる様々
な解釈がなされてきた。いずれにしろ、戦後まも
ない村の野原で、「かしてこらんぼくが殺してあ
げる」からと相手の手の中にある小動物を要求し
ている光景が歌われている。戦後子どもたちに芽
生え始めた残念性が一つのドラマとして読者に
供されている。

今回の練習：区文語と口語

佐々木幸綱(心の花)、水原紫苑Ⅱ所属不明

◎烈震も揺さぶられたる原子炉の奥に冥王
目覚めざりしか

田宮朋子プロファイルⅡ昭和二五年新潟生。

『コスモス』所属。「難の時間」「星の供花」「雪
月の家」

◎蜜吸ひては花のうへにて踏み替ふる蝶の
脚ほそしわがまなかひに

横山未来子プロファイルⅡ昭和四七年東京生。
『心の花』所属。「樹下のひとりの眠りのために」
「水をひらく手」「花の線画」

(いずれも短歌年鑑平成二四年版)

今回の練習：Ⅷ恋の歌

栗木京子(塔)、俵万智(心の花)、

松村正直(塔編集長)小島なお(コスモス)

前回の宿題：Ⅶ文語と口語より。口語を生
かした秀歌↓J(意味がよくわからない)

◎鏡なす「みなかみさん」が真麻蔭の「フツ
キー」となるこいつ酔ってる 水上英季

一説に、「真麻(まを)(Ⅱ辛(からむじ))で編
んだ蔭(こも)。◇「ま」を」は共に接頭語。ま
をこもⅡ真小蔭。

歌集「静かの海」Ⅱ第一歌集、コスモス叢書。

「まをこも」は単なる「むしろⅡ籬・菰」と解釈して
よいのではないか。フツキーⅡものまねタレント。

鏡Ⅱ手本、模範の意あり。

短歌練習ノート 第5回

前回の復習：区文語と口語

優れた文語の歌↓B

◎最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべ
となりけるかも 斎藤茂吉「白き山」

「逆白波」は、流れの逆に吹く風に立つ白波。造
語といつてよい。大河である最上川の流れに逆風
が荒れて、すさまじく吹ぶく雪、白じろと流れに
逆らつて騒ぎたつ白波。夕暮れにつつまれて荒
涼・凄惨ともいふような情景である。「ふぶくゆ
ふべ」となりけるかも」という強い響きと、「逆
白波の立つまでにふぶく」という把握には、荒涼
たる自然の中に、作者自身の心熱のような意力が
こもる。凄まじいまでの自然への驚異感が躍動す
るのを見逃せない。(現代短歌鑑賞辞典・武川)

今回の勉強の方向性：文語と口語の用い方
について更に理解を深める。

◎傘をさす一瞬ひとはうつつむいて雪にあか
るき街へ出でゆく(原歌)

永田談：上の句にすこく反応しちやった。
[文] 傘をさす一瞬ひとはうつつむきて雪にあ
かるき街へ出でゆく

[口] 傘をさす一瞬ひとはうつつむいて雪にあ
かるい街へ出でゆく

◎铁塔の向こうから来る雷雨かな民俗学の
授業へ向かう

永田談：雷雨は铁塔の向こうから来るとい
う表現は、とてもリアリティがある。
[文] 铁塔の向こうより来る雷雨かな民俗学
の授業へ向かう

□ 鉄塔の向こうから来る雷雨です民俗学の授業へ向かう

◎ 話しはじめが静かなひととあたりけりあさがほの裏のあはきあをいろ

永田談：話しはじめが静かなひととあたりけり、とてもいいですね。・

文 話しはじめが静かなひととあたりけりあさがほの裏のあはきあをいろ

□ 話しはじめが静かなひととあたりけりあさがほの裏のあはきあをいろ

◎ ひとりきりなんだよ空はうつむいて歩いてゐるよそれくらい分かる

米川談：こういうところに作者の若さも出ていていいですね。・

文 ひとりきりなり空はうつむきて 歩いてきりぬ そを理解せり

□ ママ

◎ 自分が死ぬわけではないと安堵する自分もあたりくらく照る月

米川談：行き詰まったときに、こういう思いがよぎる、強い悲しみがあります。・

文 己が死すわけにはあらずと安堵せり己もあたりくらく照る月

□ 自分が死ぬわけではないと安堵する自分もいますくらく照る月

◎ 雨はふる、降りながら降る。生きながら生きるやりかた教へてください

米川談：雨を捉えながらとても独特で、観念的な表現ですが面白いと思いました。・

文 雨ふりぬ、降りつつ降りぬ。生きながら生きるやりかた教えたまほし

□ ママ

◎ 苦瓜のやうなかをりに雨が降る「男なら泣くな」とむかし言はれき

文 苦瓜の「ときかをりに雨降り」男なら泣くな」とむかし言はれき

□ 苦瓜のやうなかをりに雨が降る「男なら泣くな」とむかし言はれた

◎ 右がはの後ろの脚がとれてゐる蜘蛛が硝子の空をわたるよ

島田談：上の句に実に微細なりリズムがある。作中の主体像がわりあい淡く見える一連ですが、こういう感覚的な描写の部分で、作者ははつきり顔を出している。

小島談：全体の構成で読むと、このあたりでだんだん高まっていくんですね。

文 右がはの後ろの脚がとれてをり蜘蛛が硝子の空わたりゆく

□ ママ

◎ 白鷺をつばさは漕いでゆきたりきあなた死に間に合はざりき

小島談：命というものについて、自分がぐらぐらしているとき、それに対する確かなものをみたという。「死に間に合はざりき」

という心情の中で、白鷺を翼は漕いで行ったという表現が出てくるのは素晴らしい。

文 白鷺をつばさは漕いでゆきたりき汝の死に間に合はざりき

□ 白鷺をつばさは漕いでゆきましたあなた死に間に合はざりき

次回練習：「悲恋の歌」 ヒント

（景と情の組み合わせ）、「抒情歌」と「叙景歌」を思い出しながらかいてみましょう

永田和宏歌集「夏・二〇一〇」

書評より：（全編が相聞歌であり挽歌の集）

◎ 凹んでゐるけふの私を慰めよそこにいるなら おーい、をみなへし（全部口語）

◎ カモミール淹れようかと言ふ 存在のはかなき午後の陽の騒る庭

（カモミール淹れようかと言ふ 存在のはかない午後の陽の騒る庭）

◎ 「ゆうこー」つと呼べば小さき息ひとつ吸ひ込みぬ最後のわがための息を

（「ゆうこー」つと呼べば小さき息ひとつ吸ひ込みぬ最後のわがための息を）

◎ ときどきはあなたのケイタイからかけてみる なあにお母さんと紅が応ふる

（ときどきはあなたのケイタイからかけてみるなあにお母さんと紅が応ふる） 次号へつづ



写真

上：アイリン・ライザー展より

下：北陸女学校五十年史より

☆三小牛の北陸学院

二〇二二年一月二十九日、湘南村国際センターで開かれた国際交流短歌大会終了後、同行してくれた娘（西宮在住）と一緒に鎌倉などを観光しながら町田市（東京都）で新しい曾孫（長男の娘の子）たちと交遊。その後、長男や娘や孫たちと別れ、われわれ夫婦は新横浜から新幹線で金沢へ向かった。目的は、母校・北陸学院で主として江戸さい子先生の資料を集めること、教え子の助教・福井逸子先生（聖和大学大学院修了）などと旧交を温めること、そして羽咋の釈道空親子の墓所を訪ねて歴史資料を探すことなどであった。

どんよりと曇った空、控えめな北国の発音アクセントなど情緒を懐かしみながら、十二月四日、市内三小牛の北陸学院に向かった。途中、タクシー運転手に知事公舎の向いの北陸女学校跡地を廻ってくれるように頼み、止めてくれた車の中から記念の石碑を探したが見付らなかつた。

兼六公園を左に見ながら小立野へとタクシーで広坂を登るとき、私は俄かに、女学生だった戦時中の馬糞拾いを思い出して苦笑した。食料増産の畑作りの肥料として、我々女学生は週一回、園芸の授業で馬糞拾いを行なったのであった。当時の運搬手段はもっぱら馬で、なぜか馬たちは広坂を登りながら糞を垂れた。そのころ馬糞は貴重な肥料だったのである。

左に飛梅町の高等学部の校舎をみながら、車は小立野の陸軍練兵場跡（多分今の金沢大学）を通って雪道を三小牛へと向かう。何て狭い道なのだろう、昔もこんなに狭い道だったのか、それとも住宅などが建ったためか、思い巡らしているうちに北陸学院本部（大学および小学校）へ到着。福井先生たちの歓迎を受けながら、美しくクリスマス装飾の施された廊下を通って院長室へ。有名なヨハネ福音書の最初の聖句が見事な毛筆タッチで書かれた額を背に、牧師で理事長・学院長の楠本史郎先生と一緒に、ギルバートも私も仲良く写真に納まったのであった。



左から 石垣篤紅、楠本史郎院長、ギルバートJペリー

楠本学院院长との話題は尽きなかつた。石浦町から柿木島に移った金沢教会、上河原牧師、教会オルガニストだった母。若草教会の加藤牧師、彦根教会。本多町の幼稚園（のちの北陸短大）。飛梅町の西洋館（のちの高等学部）。番匠鉄男院長。etc. 教え子の福井先生は午後から授業があるとのこと、その前に「アイリン・ライザー展」を案内したいとのこと、彼女の車で小立野の「ワイン館」へ案内して頂く。

母・吉村繁子(故人)は北陸女学校の卒業生で、ライザー先生の教え子だった。私も北陸女学校で学び、新制高校第一回の卒業で、母同様、ライザー先生から英語を習った。

俄かに、ライザー先生との関わりや沢山の思い出が胸に込上げてきて、金沢の雪景色と重なった・・・

☆一九四一年(昭和一六年)の横浜港

日中戦争の発端となった盧溝橋事件が起ったのは一九三七年七月七日。その後、日本と中国だけでなく米国との関係も次第に悪化して、日本在住の英米人には本国帰国の指令が出された。つぎつぎ宣教師たちも帰国の途につく中、一九四一年三月、最後の引揚船が横浜港から出港することとなった。最後まで粘ったライザー先生も、強制的にこの船に乗らざるを得なかった。太平洋戦争開戦が同年十二月八日だったから、最後の引揚船はその半年前のことだったのである。

当時私は、東京の西落合に祖父母と住み、大泉師範学校付属国民学校(小学校)三年生で十歳。母は北陸女学校の教師だった。春休みに東京に帰省した母は、私をつれて横浜港から引き上げるライザー先生を見送りに出かけた。

私は客船の中に入るのは初めてだったし、西洋人と面会するのも初めてだった。何て素敵で綺麗な船だろう、船室は一人部屋のツインで、もう一人の婦人宣教師と同室だった。室内はもちろん、船内は見送り客でこったがえていた。でもライザー先生は目ざとく私たち親子を見つけて、近寄ってきて握手をしてくださった。母は何かお土産を渡したが、それが何だったのか私は憶えていない。「こんな粗末なお部屋で何日も旅をなさるのね、お辛いでしょうね」と見送りに来てい

た母の知人が言ったのをはっきりの憶えている。「えみこちゃん、必ず日本に帰ってきますからね」とライザー先生が私に言われたのも、はっきり憶えている。

ドラが鳴り、見送り客は下船させられ、岸壁と甲板と無数のテープが飛び交った。蛍の光の曲と共に船は少しずつ離れていき、テープは切れ、汽笛と共に沖へ遠ざかっていった。

☆終戦一九四五年・・・そして翌年

戦時中の北陸女学校には、残念ながらもじめな思い出が多い。負けいくさが明確になり始めたころ、軍服を着た視学官がやってきて全生徒に、聖書と讚美歌を運動場に持参させて火をつけて燃やした事件があった。教室で「我々の信すべき神は誰か?」「天照大御神をどう思うか?」「靖国神社に祀られているのは誰か?」「天皇陛下は現人神(あらひとがみ)であらせられると思うか?」などの設問に答えを書かされた。

当時、北陸女学校では毎日礼拝が行なわれ、私は日曜日には警戒警報下でも石浦町の教会へ出かけていた。未だ洗礼は受けていなかったが、信すべき神はキリストの神以外にないと思っていたし、クリスチャンの母が次第に教会から足の遠のくのを見て批判的にもなっていた。だから、視学官が配った用紙に私は正直に自分の信仰を書くべきだと思ったのだが、急にその場の異様な雰囲気怖くなり、「我々の信すべき神は天照大御神」「天皇陛下は現人神(あらひとがみ)であらせられる」と書いてしまったのである。生涯忘れられない思い出で、受洗を決心した原点でもある。

終戦の翌年、一九四六年、宣教師として真っ先に戻って来られたのがライザー先生だった。私は北陸女学校三年生で、

興奮しながら歓迎会に参加したのを覚えておる。しかし何より心底から有難かったのは、北陸女学校教職員のために山のような食料を携えて来られたことだった。一週間が過ぎた夕方、既に帰宅していた私を母が呼びにきて言った、すぐにリアカーを引いて学校にきなさい、と。いぶかりながら薄暗くなった学校の職員室へゆくと、先生がたは各々、山のような缶詰類を前にその運搬に興奮しておられた。軍隊用の超特大の缶詰は粉乳、粉卵、コンビーフ、バターなど。他に大きな砂糖の袋、小麦粉の袋、ヌードル・スープの袋など、全部で六〇個ばかりもあったことを憶えている。重い荷をリアカーで母と運び、住居だった本多町の幼稚園二階へと階段を何度も往復して運び上げた。当時は日本中が飢えていた。ライザー先生のお陰で、私たち母子は栄養失調から免れた。本当に有難いことだった。

或る日、学校でライザー先生とすれ違ったとき、「えみこちゃん、後で宣教師館にいらっしやい」と言われた。何事かと思つて放課後に出かけてみると、先生は何着かのオーバー・コートを用意していて、私に試着させ、「これが一番似合いますね」と言つて、水色の素敵なコートを私にくだった。天にも登るような気持ちで、その柔らかい香らしいコートを着て帰宅した私を、母は狂喜して眺めた。ライザー先生って何で素敵なのだろう、アメリカかって何で素敵な国なのだろう。宣教師館で聞かれる英語のバイブルクラスに私は必ず出席して讚美歌の伴奏をした。宣教師館のピアノは柔らかい音質で、とりわけ心が和んだ。教会オルガニストへの道を懂れた。

☆西洋の文化と東洋の文化

西洋への文化の窓口がライザー先生だったのに対して、日本的なものの東洋的なものにも心を引かれたのは、今思えば、祖母の影響が大きかったと思う。物心ついたとき、私は東京の祖父の家で暮らし、母は金沢の北陸女学校の先生で、母と会えるのは学期末に母が東京へ帰省してきたときだけだった。祖母は琴の名手で、座敷の床の間には琴が立てかけてあり、祖母は慰みにときどき奏でていた。赤穂義士の物語や「風さそう花よりもなお我はまた春のなごりを如何にとやせん」という浅野内匠頭の辞世の歌が好きで、高輪の泉岳寺につれて行って買ったこともある。正月には帰省した母や祖父を交えて百人一首に興じたが、上の句を読む祖母の声は印象的だった。代々武士の家系だったらしく、廃藩置県後に祖母の父は初の鳥取県令になったとのこと。母は自分の履歴書に「鳥取県士族と書くのを誇りとしていた。そのためだろう、祖母には和歌の素養もあった。

祖父の仕事の関係で移り住んだ金沢で、母は北陸女学校に入學。ライザー先生から英語を学ぶと同時に、江戸さい子先生から国語を、島倉房子先生からオルガンを学んだ。その後一家は東京に移ったが、戦争で空襲が激しくなり、また金沢に疎開して私も北陸女学校に転校、国語を江戸さい子先生から学んだ。江戸先生は常に袴を召し、国語の授業では毎回、和歌を美しい字体で板書された。「ひさかたの光のどけき春の日にしづこころなく花の散るらん」と黒板に書かれた美しい字を時おり思い出す。(明治以降、和歌は短歌と呼ばれる)

国語の時間には戦気高揚のための短歌を作らされた。尤も当時は短歌だけでなく標語やポスターや戦地への慰問文など、戦争に関連つけた授業内容が多かったから、私が作った歌も、

「勝つまでは欲しがりません 贅沢品兵隊さんのことを思い
て」など、戦争協力短歌ばかりだったが、江戸さい子先生は
五七五七七になつてゐると褒めてくださった。

戦後の混乱期、当時の女学校は旧制だったから四年で卒業
する者、五年で卒業する者、もう一年学んで新制高校卒業の
資格を持つて出て行く者に分かれた。私は新制高校卒業の
道を選んだ。ほとんどが五年生で卒業してしまい、十人だけ
が残つて一年間、机を並べて勉強した。正規の英語の授業以
外にライザー先生の英会話は毎日あり、十人は鍛えられた。

☆ウイン館にて

あれこれ昔のことに思い更けりながら、教え子の福井逸子
先生運転の車は飛梅町の「ウイン館」へ到着した。

ウインという名称は、一八八四年（明治十六年）ころ金沢
で伝道を行なつたトーマス・レイ・ウイン宣教師夫妻と、戦
後来日されたその息子の妻ミセス・ウインを記念して名付け
られたのだろう。戦後ミス・ライザーが金沢へ再来された一
年のちに來られたミセス・ウインからも、私は英語を学んだ。
ライザー先生は何となく威厳のある方だったが、ミセス・ウ
インはチャミングで、シヨーク好きな方だったのを憶えて
いる。

前の週まで開催されていたという「アイリン・ライザー展」
は、「北陸学院と日本を愛した生涯」というサブタイトルが付
けられ、ライザー先生の大きなポートレートが一際目を引い
た。福井先生と私は、まず、江戸さい子先生が作詞された北
陸女学校校歌のディスプレイの前に立つて、期せずして声を
揃えて一緒に校歌を歌った。

江戸さい子作詞 北陸女学校校歌

一、森の都の古城の南 柳さくらのあや織るそのは

若き命の伸び行くところ 信と愛をかざりてなして

我等鍛えん あふるる力

(折り返し) 仰げば高く栄えある校章(しるし)

星に万古の光あれ

二、東と西との文化の波の 寄せて一つにとけあう中に

日出づる国のおとめご我ら きよきみ教え正しく直く

受けて進まん 真理(まこと)の道に

福井先生と一緒に歌いながら、「今は共学なので、一番の
〈おとめご〉を〈若人〉に変えて歌つてゐるのですよ」と言わ
れた。福井先生は北陸学院の卒業生ではないが、卒業生の私
と声を揃えて歌つておられることに私は感動した。

そして、展示をみてゆくうちにライザー先生と江戸さい子
先生には明確な接点を発見して驚いたのである。

☆ライザー先生と短歌

ライザー先生は日本語の短歌
の美しさに惹かれ、国語の江
戸さい子先生に師事して短歌
を作つたという。上の写真は
江戸さい子先生と、ライザー
先生が短歌を勉強する風景。

お二人とも若い。多分、戦前
の写真と思われる。

(江戸さい子ウエブサイトより)



ライザー

坂の上　新しき家　作りたり　菊の香りは　君の詠みうた
わが心　雲暗き世も　御^みともしび　輝きぬれば　明るくな
りぬ

江戸さい子ウエブサイトより

<http://9.atpages.jp/edosaiko/nishino.php>

○昭和十六年帰米のライザー女史を送る　江戸さい子

雲水の動きにつれて思はまし君が去りゆく万里の彼方
はたとせの思出いかに深からむ越の山川雪にさくらに

○昭和十六年三月　金沢出発に際して　ライザー

花さかむ春をみずして幼稚園つぼみの時にわれは去りゆく
ふるさとに朝夕祈り平和の日来らばまたもここにかへらむ

○昭和二十一年　ライザー女史の帰校を迎えて　江戸さい子
うれしくも平和の日には来むと云ひし言葉たがえずかえり
きませり

戦ひを交へし国の人と人相見るさまとみえぬしたしき

お二人の国を越えた短歌による交流に、何とも言えない絆
と、短歌の持つ力強さに心を打たれた。

☆ハッセル図書館にて

午後から授業をされる福井先生の車で再び三小牛の北陸学

院に戻り、学食から取り寄せて買ったランチを三人で頂いた
のち、ハッセル図書館に向かい、
ハッセルというタイトルは、北陸女学校創立者・メレー・
ケー・ハッセル女史を記念して名付けられたのだろう。



左から
大西敏子司書　石垣、福井逸子先生、飯野昌子司書

私どもの訪問は事前にハッセル図書館の司書の方にもメールでお願ひしたところ、司書の大西敏子さんからメールでお返事があり、「私は吉村繁子先生にお教えたいただきました」と文末に記されていた。母を覚えていて下さる方が北陸学院で働いておられることに、改めて感慨を憶えた。

彼女は、私の当初の目的だった江戸さい子先生に関する資料を、かなり詳しく集めていて下さっていた。また以前、母の本箱にあって今は失ってしまっている「北陸女学校五十年年史」を、余分があるからと一冊頂戴できた。飯野昌子司書は私のために沢山の資料を実費でコピーしてくださった。かえすがえすも感謝であった。

図書室での学生たちの勉学風景は、当たり前の風景のはずなのに、とても新鮮に感じられた。

☆ライザー先生が著した小説「盆栽の松」

楠本院長から私のもう一冊、素敵な本を頂戴した。「盆栽の松」THE DWARF PINE: 小林恵子編集・発行」というライザー

先生が自ら書かれた小説である。何と先生は短歌だけでなく小説まで書いておられたのだ。

実は北陸学院を訪問した翌日、私もは羽咋の釈造空親子の墓を訪ねて、資料館からも資料を頂けるよう事前に依頼していたのだが、その夜から夫・ギルバートの風邪と咳がひどくなり、咳は喘息発作のような様相を呈した上に金沢地方に暴風警報が発令されて列車が止まってしまった。止むをえずホテル待機となり、羽咋市役所にはお断りの電話を入れ、ホテルの自室で休む夫の傍で「盆栽の松」を読むことにした。



すぐに私は小説の世界に引き込まれた。松田みどりという手に障害を持つ女性が主人公で、古い封建的な風習の残る戦前の社会を舞台にして、その生き様、淡い恋、家族関係、

価値観がさり気無く描かれている。運命や宿命に真っ向から立ち向かうのではなく、控えめに粘り強く受け止めて生きる北国の女性の姿が印象的だった。物語には聖書の信仰に結びつく示唆もあるが、あえてハッピーエンドに持っていかず、仄かな可能性を漂わせながら終わることで、読者をもつてであろうこの種の小説にありがちな説教的失望感を排除して文学的效果を挙げている。

この小説を読みながら、途中から私はそのモデルになった女性に思い当った。母のクラスメイトで親友のOさんではないか？ 私の知る限りOさんは常に母の傍、私たち家族の傍にあった。鵬長けた着物の彼女の持つ雰囲気は独特で、好ましい仄かな匂い、言葉遣いや物腰、立ち居振る舞いは奥ゆ

かしく上品そのもので、右手の指には常に着物にマッチした趣味の良いハンカチがさりげなく巻かれていた。思わず憧れたくなるような女性だったが、ある日、母は「Oさんの右手の指三本は半分しか無いのよ」と言った。それ以来、私はOさんが家に来られる度に母の傍に座ってその右手に注目し、彼女が何かの拍子にハンカチを外さないかと注目したが、一度もそんな機会は訪れなかった。Oさんの家庭が複雑だということとは、Oさんと母との会話を聞いていて、少女だった私にも想像できた。でも常に彼女は明るく振舞っていた。

今思うと、Oさんは私の疑念に気付いていたと思う。でも素知らぬ顔で穏やかにお茶菓子や会話を楽しんでおられた。彼女はライザー先生のバイフルクラスの熱心な生徒だった。Oさんが小説のモデルのある部分を占めていると私は核心的に直感した。そして益々、この小説に魅力を感じたのであった。

もう一つ、一九〇七年（明治四〇—四一年）ごろ起ったといわれる寒潮事件を、ライザー先生は知っておられたことが「盆栽の松」を通して察せられた。これは当時の大阪毎日新聞紙上に掲載された小説で、モデルは旧制第四高等学校（四高）の生徒と北陸女学校の生徒だったとされる。モデルといわれた生徒は退学処分となり、四高の学生たちは悲憤慷慨して大毎ポイコット運動に発展した。

その他、「盆栽の松」の下宿屋の描写や政治運動、モダンガールなど、ライザー先生の観察眼は鋭い。下敷きとなる資料をよく調べておられたと思う。

第一部に出てくる秋山屋子さんや吉田真知子さんの「ライザー先生のお墓探し」、私の経験とも重なり共感させられた。

小林恵子さんのご努力に感謝したい。お若いころの頑張り屋さんの彼女の姿とだぶって、懐かしさが込め上げた。

☆エピソード

ライザー先生の真骨頂は、北陸学院保育短期大学の初代学長、そして一九五五年（昭和三十）の勲五等瑞宝章の授与でしょう。江戸さい子先生の真骨頂は、一九五六年（昭和三十一年）十二月の宮中歌会始めに陪聴の栄に浴したことではないでしょうか。江戸さい子先生については今後、本紙第二ペーシ、「恩師・江戸さい子の横顔」に連載していく予定です。

私（石垣）自身は、北陸学院高等部（新制第一回）を卒業後すぐ、関西の聖和女子学院保育科に入学しました。もう一年待てば北陸学院保育短期大学（ライザー学長）が発足したのですが、若い私は何としても都会に出たかった。聖和には南信子という素晴らしい先生がおられるとの期待もありました。（ところが入学してみると南先生は入れ違いに北陸学院へ赴任されたのです）

母が北陸学院の教員だった頃は休みに帰省していましたが、母の定年退職後は私も北陸から足が遠のき、ときとき風の便りに母校の発展を耳するだけになって月日が過ぎました。

北陸女学校の創立は一八八六年（明治十八年）九月九日だといわれています。日本には一〇〇年以上の歴史をもつミッション・スクールがかなりありますが、北陸学院は実に二〇〇年近い歴史を持つ者舗で、キリスト教主義幼稚園としては日本で最古です。この北陸学院から母・吉村繁子、私・石垣恵美子（旧姓川吉村恵美子）が巣立ち、さらに小学校を私の長男（石垣義人）、次男（石垣真人）が卒業、長女（ヤンのぞみ）も小学校二年まで学ばせて頂きました。この度、久しぶ

りに北陸学院を訪問して、改めて感謝の思いを厚めた次第です。この場をお借りして、心より御礼申しあげます。

さらに、楠本院長から貴重な御著書「幼な子をキリストへ：靈性をほぐくむ保育教育の理念の贈呈をうけました。」二〇〇八年に北陸学院大学（四年制）発足を記念して「臨床心理学リイオン・ブックレット」、学院と協力連携を行なう研究者による学術論文シリーズの第一号で、聖書の幼児観がわかりやすく述べられています。特に、第三章で靈性 spirituality をほぐくむ保育を、第四章で保育・教育の神学的検討を展開。律法から福音へ、そして最後に福音から律法へと論を進めておられます。従来の自由保育理論でとすれば軽く扱われがちだった「神を愛する者がともに重荷を担い合う」べき律法について、理論的に展開されていて瞠目でした。私自身はもう保育・教育の第一線から引退した身ですが、今回ひさびさに曾孫たちと交流して「おさな子をキリストへ」の重要性を感じ、「福音」の意味を反芻する機会を与えられたことは本当に感謝でした。心より御礼申しあげます。

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

詠草三首

みつこうじ
三小牛

石垣 萬紅

道
こんなにも近かったのか三小牛らしくく奔跑る雪の山

江戸さい子 アイリン・ライザー この二語を声にしてみる歌にしてみる
ウィーン館

朝餉より湯豆腐小鍋が付いている師走の旅の北国の宿

探歌往來

▽海外日系人文芸祭で受賞された原葉さんが受賞式に参加され、次のような感想文を寄せてくださいました。

去る十一月一日 日本で行われた第九回「海外文芸祭授賞式」に出席して来ました。三日間行われた「海外日系人大会」の最終日での授賞式は一時足らずの駆け足状態でした。海外から参加の私には多少物足りなさを感ずけました。海外からは私を入れて五名の参加。あとは日本からの参加で、短歌、俳句、学生部門を加え十六名が壇上に呼ばれました。ハワイからは私一人でした。受賞者の中には俳句部門で小学一年生の男児がおり驚きました。短歌、俳句で大賞を受賞したお二人が表彰されましたが、俳句部門は高校三年の男子生でした。その後入選者に賞状が渡され終了となりました。

今後学校教育小中高の文芸面を充実して行きたいとの事務局の談話がありました。今回参加して感じたことは短歌、俳句ともに学生の多いことに改めて驚かされました。最少の小学一年生、ポーサムひゅー君の俳句を紹介します。

め。は。は。な。で。じ。ゅ。ん。ば。ん。ど。り。ボ。ジ。ー。さ。ん

短歌雑誌 加州短歌

CALIFORNIA TANKA
Magazine of Tanka Poetry



NO.133 WINTER 2012
12.31.2012 VOL.34 NO.4

▽カリフォルニアから『加州短歌』133号の贈呈を受けました。以前にも書きましたが、同紙は一九七九年の創刊。年四回の発行。アメリカの地にあって今日まで絶えることなく続けられている編集・発行人の松井

久志氏に全く頭がさがります。同紙表紙裏ページに「歌の素材」をどう生かすが、ヒントがさりげなく述べられており、

このような配慮が長続きの「コツ」ではないかと思われました。今回、本紙の「友情出詠作品」に寄稿して下さった古田和子氏は長年のカリフォルニア短歌会の同人です。

▽第七回国際交流短歌大会で次の歌集や論文を頂戴しました。

◎ 結城文 歌集「光る手」

◎ 結城文 歌集「新しき命を得たり」

◎ アンナホーリー／結城文「Spreading Ripples 命のやわなみ」

◎ Jane Reichhold / Aya Yunki 序文および邦訳：結城文
「TAKING TANKA HOME タンカをひるやうく」

◎ 北久保まりこ アメリカ・フィールトン On This Same Star!

◎ 北久保まゆみ アメリカ・フィールトン Cicada Forest!

◎ POETRY NIPPON. by Poetry Society of Japan

◎ 塩野崎弘 論文 万葉集英訳の百年

▽第七回国際交流短歌大会で、次の本を購入しました。

◎ アーサー・ヒナード著「日本の名詩、英語でおどろ」

みすず書房2007（英訳は詩を外国へ旅立たせる交通手段・日本の読者のためのもうひとつの入り口・など心に響く言葉がいっぱいで示唆に富んだ本です。）

▽釈道空とハワイの関係について、沢口美美氏（滄短歌会同人）と個人的にお話できて感謝でした。進展を願っています。

▽在米日本人のための同人文芸誌『平成』62号が届きました。作品はエッセー、随筆、旅行記、小説など多数ですが、詩歌三点、短歌三点、俳句二点も掲載されています。

友情出詠作品募集および二人推敲

- ◇本号には七人の方が友情出詠くださり有難うございました。
◇本誌は会員制ではないので応募はどなたでも可能です。
一人三首以上一〇首。締切〓二月末日。
◇今回は「二人推敲」の時間的余裕がなく、やむなく割愛しました。「二人推敲」は実際にはEメールをお持ちの方でないとな
難しいし、短歌に関する程度のある程度の下敷きがないとな
かなか実りません。しかし評判はよいので可能な限り続け
いと願っています。応募希望の方は、お申し出ください。
◇次号（五号）発行〓二〇一三年四月一〇日の予定。

アロハ探歌 ALOHA TANKA (石垣薫紅個人誌)

400 Hobron Ln #2501 Honolulu HI 96815- USA

編集後記

◇本号から表紙にハワイ在住の画伯・本田邦夫氏の挿絵を頂戴
することになり感謝です。◇本紙は今回は三二ページになり、
「二人推敲」「覽古考新」は割愛します。◇予定していたサイデ
ンステッカー博士の足跡（仮題）も次号に回します。◇今年も
アロハの心で短歌の道を探求して参ります。ご支援下さい。薫。

「アロハ探歌」四号 二〇一三年冬号 JANUARY 10, 2013 VOL.2, NO.1

発行/編集 Eniko Ishigaki Perry, Ph.D. (筆名 石垣薫社)

発行所 : 400 Hobron Lane #2501 Honolulu HI 96815-1206 USA

E-mail: ishigaki-e@ivy-red.net www.ivy-red.net Ph: 1-808-942-0112